

盲僧と琵琶楽

中野 幡 能

序

- 一 盲僧の起源
 - 二 盲僧琵琶楽の発展
 - 三 盲僧琵琶の開山玄清
 - 四 太宰府座
 - 五 盲僧琵琶の分裂
- 結

序

琵琶楽の伝来は既に奈良朝前後からみられるのであるが、琵琶楽は筑前に関係が深く明治にはいわゆる「筑前琵琶」が発生し隆盛となった。筑前の琵琶は盲僧に関係深く、盲僧の中で成長したと考えてよからう。しかし筑前に育った盲僧の集団即ち<盲僧教団>についての研究は少く、戦前におけるこの研究は飯野快順著『琵琶仏教上(沿革編)』や、完淡萊氏「九州盲僧の総本山」(一)~(七)篇(福岡日日新聞大正十三年二月二十七~三月四日)や九州日報掲載の報告や部分的には、折口信夫氏により詳細には中山太郎氏『日本盲人史』に取りあげられたのである。戦後始めてとりあげたのは拙稿「九州地方の盲僧教団」(宗教研究一五四号昭和三年)と更に拙稿「盲僧教団の歴史」(大分合同新聞、昭和三年七月二日)などがあり、つづいて桜井徳太郎氏『講集團成立過程の研究』に部分的にとりあげ、つづいて拙稿「盲僧教団の宗教儀礼」(宗教研究一九五号昭和四三)がある。琵琶楽については田辺尚男氏の研究があり琵琶そのものについては岸辺成雄氏が、中国での琵琶楽器に秦琵琶・漢琵琶・龜茲琵琶の三種のあることを明らかにしている。田辺氏によると、こゝにとりあげる盲僧が使用する琵琶は龜茲琵琶で、印度に於て盲僧が専ら用い、それが南支那に入り、広東地方の琵琶となり、九州に伝来して盲僧琵琶になったものであるとされている。

そして盲僧琵琶の発展統一は平安初期に北九州に於て行なわれたとみてはば誤りはあるまい。そしてこの教団は天台玄清法流と称し、福岡市下高宮成就院を本山として今も継続しているが、時勢の動きはこの教団にも多くの変化を与え漸く衰退の一途を辿っている。しかし我国の琵琶楽を庶民のものにしたのは盲僧教団の僧侶、座頭であり、その意味から、我国音楽史上にこの教団は重要

な位置を有しているといわねばならない。そこでこれ等盲人の宗教行事に関連して成長してきた盲僧教団と琵琶について試論を述べてみたい。

一、盲僧の起源

始めに我国における琵琶楽の問題から入って行くことにする。我国の琵琶の輸入は既に古く奈良朝以前から入っているので正倉院御物の中にも既に三種の琵琶がみられるのである。そしてそのことについては既に田辺尚雄氏が明らかにしている。

そしてその史料になったものは、薩摩の琵琶楽については、常楽院(鹿児島市長田町)所蔵『盲僧由来記』であり、筑前の琵琶楽については筑前の成就院(福岡市高宮町)所蔵の『玄清法印芳蹤記』である。

これ等二本の史料は何れも江戸時代の記録で、信頼出来ない点も多いので中山太郎氏は偽作として、九州の盲僧琵琶の起源も平安末期の物語琵琶=琵琶法師の伝流とみているようである、しかるに田辺尚雄氏は楽器として琵琶その他から⁽¹⁾盲僧琵琶の伝来は奈良時代直前に九州に入り、それが都へも紹介されたものであろうとしている。⁽²⁾

そしてその根拠となるものは前記常楽院及び成就院の史料は近世の記録ではあるが、伝承としての資料も含まれているのでとるべき点のあることを暗に認めたからであろうと考える、このようにみると仮に『盲僧由来記』を甲本とし、『玄清法印芳蹤記』を乙本としてこれを可能な限り批判してみるのも、盲僧琵琶楽のみならず、盲僧教団としての立場に於ても意義のあることであろうと考える、そして田辺氏も大様この二本の源流を一つとみている、甲本が玄清を無視して京都に重きをおき鎌倉時代薩摩島津氏に召拘えられた以後の事が詳しいことなど

を示摘している点からも、二種の由来記のもとをなす伝承は鎌倉以後にとくに大きく変容して行ったものではなからうかと考えられる。そして既に常楽院流については可成り明瞭になっているのに対して、成就院流は十分とはいえない。そこで成就院流の動きをでき得る限り批判、考察してみたいと思うのである。成就院については先の『芳蹤記』の外にその末寺には『成就院縁起』（仮称、以下吉武本という）なる写本がある。この縁起は「正安三辛丑歳三月望日受三大徳敬書」なる奥書がある。

『芳蹤記』には「寿讚大徳」となっている。その他この二本を比較してみると、『芳蹤記』の方がはるかに詳細である。吉武本も可成りの誤写等があるので、可成流布したものであろうが、正安三年（1301）は受三大徳が永仁六年（1298）妙音寺を建立して四年目の年であり、受三が妙音寺を建立し、その後それまでの伝承、その他の資料を使って編纂したのではあるまいかと思われる節もある。そこでむしろ『芳蹤記』はこの正安本を材料にして江戸時代に編纂したものであるまいか。勿論この縁起をそのまま採用することは危険ではあるが、妙音寺安置の聖観音像や本堂といわれる観音像や庫裡は、博多蔵本町より、現在高宮成就院に移建されているし、観音像は鎌倉の仏像とみてほゞ誤りもあるまいと考えられるので、正安三年奥書も無下に否定できないようである。そこでここでは正安本をもとにして、筑前盲僧を考察してみることにしたい。

(1) 印度における盲僧

盲僧成就院縁起（以下縁起吉武本という）によると鎮西の盲僧の起源については、印度に始まっているとしている。盲僧縁起によると

天竺阿育大王ノ御子俱奈羅太子ト奉申、然ルニ彼太子実母死去ノ之後、為繼母后被妬・干時・徳又羅国王在御・故請比太子讓国・然旧国繼母遺恨尙未止・於斯鑑遣曰・父大王受重病・存命不定也・相人占云・挺大子兩眼為藥・可在本快・思濟父王之命・急可捧兩眼・太子信是・堰兩眼贈之・成盲瞽、於茲捨王位・五歳御子金剛太子被引御手・諸国於遊行彈琵琶給・其音妙故・妙音菩薩在降臨・被示琵琶秘曲・従是入釈門・為盲僧給得共……

とある如く、盲僧の起源は印度阿育王の皇子俱奈羅太子は実母を失い繼母が入ったので妬まれていた。その時徳又羅国の国王が崩御したので俱奈羅に譲られた。ところが偽いて父王が重病になり、命を濟うために太子の両眼を薬にすれば全快すると申伝えたので、太子は両眼を父王に捧げ盲目となったので王位を退き、五才の太子に引かれて琵琶を引きながら諸国を遊行したが、その音の妙

なるに感じ、妙音菩薩が降臨して秘曲を示されたというのである、しかるに太子は王位にあった人であるから治国憐民の心が厚く、仏教により国家を護ろうとして金光明最勝王經の中の堅牢地神品を誦しながら琵琶を弾き天下泰平のために勉勵され、竟に天竺鳩戸那国の跋提河辺にて十月十八日に崩御した。その後阿喉太子・七騎太子は皆眼を病み盲僧になり、拘那羅太子がその流を伝えた。そこで法脉は釈迦如来、妙音菩薩拘那羅太子・阿喉太子・七騎太子と法脉を伝えた。

かゝる時に三蔵法師玄奘が天竺に入り、これを唐に伝来した。日本には欽明天皇の時祐教礼子という人の先祖が日向国宇渡窟に左遷された。この人が地神陀羅尼經の秘法を伝えたので、これを「キシマ品」と言っている。そこで祐教礼子はこれを紫陽に伝えようとしている時、日向国佐土原郷、薩摩イサゴ（伊作）ノ郷・肥後国ミナマタ・筑後国鱈坂・筑前国冷泉津・豊前国仲津に盲僧がいたのでこの法を遍く伝え、土公地神祓を勤め、地神經を誦したので九国中国に広まるようになったといっている。

これは盲僧縁起の序編に当る部分である。そして盲僧教団玄清流に伝わった縁起であるが玄奘は七世紀の人で阿育王は紀元前三世紀の王であるから時代的には距りが多すぎる。こうした考証はとも角としてこのように盲僧の起源及び伝来の由来を伝えている。もし玄奘が唐に伝来させたものであれば唐に伝わったのは太宗の七世紀の時である。玄奘は貞観三年（629）太宗に印度に遊び仏典を究めんとしたが許されず、竟に脱して玉関を出で、支那土耳其斯坦より中央アジアに入り、南下して北印を通り、貞観七年（633）中印に入り、王舎城、那蘭陀寺に戒賢論師に遇い、神伽、唯識の二宗を学び、貞観十九年（645）に唐に帰り、洛陽弘福寺に訳経し、羅什真諦の所訳に対して新訳を完成し麟徳元年（664）二月五日六十五才で寂したのである。

(2) 日本における盲僧

しかるに日本に伝わったのは欽明天皇の御代（539～571）というので約一世紀のズレがある。欽明云々というのは仏教伝来の問題に関連して加えられたことは云うまでもない。又日向国宇渡窟は鳩戸神宮のことであろうがこれも龍神信仰から附加されたのであろうと考えられるが、或は江南を通じて伝えられた、陳の大比留女伝説などの影響をうけたものであろうか。又「キシマ品」等の如きは高千穂信仰の影響もあろうし、何れも伝承としてだけの意味で記することにしたい。

さらに日向佐土原、薩摩イサゴ郷の地名は『和名抄』には郷でなく郡名であり、鱈坂は荘名であり、仲津は郡名である。こうした地名がどうして現われたかについて

てもその理由は明らかになし得ないが、平安初期に給田を賜ったという地名とほぼ同一なのでこの事に関係があらうし、又この縁起ができたという正安三年の頃には少くとも、盲僧との強い関係を有していた地域であらう。

何れにしてもこの縁起も伝承としての価値以上のことを認めることはできないのではあるが、日本の盲僧の因位を物語ったものとして興味ある民族学の資料といわねばなるまい。たゞこの中でいえることは少くとも八世紀以来、北部九州を中心に琵琶樂が伝来し、可成広く民衆化の傾向があったということと、琵琶樂も仏教音楽であったということだけはほぼ否むことはできないであらう

- (1) 中山太郎『日本盲人史』 136頁以下
- (2) 田辺尚雄『日本の音楽』 191頁
- (3) 同書 193頁
- (4) 大分県東国東郡国東町富来吉武清心氏、同町重藤橋本清光氏蔵
- (5) 阿育王 (As'oka) は中印度のマガダ地方に君臨していたマウリヤ王朝の第三世の王、チャンドラグプタの子で、父王の死後異腹の子を全部倒して王位についた。即位は紀元前268、治世は232まで続いた即位の後仏教に帰依し、慈悲の政治を行い、即位17年に第三回經典結集を行い、インド全土に多くの仏塔を建てた(新仏教辞典等)。
- (6) 伊作郷のことであらう。『盲僧由来記』によると鎌倉初期京都盲僧が島津氏に迎えられ、寺のできた土地である。筑前側が伊作郷を云々することには、筑前盲僧が薩摩盲僧もその配下にあることを強張した点が窺われる。

二. 盲僧琵琶樂の発展

盲僧と琵琶の關係は、以上の発生物語によって大凡判明したわけであるが、我國の歴史時代にどのような発展をしたか、そして琵琶は九州の盲僧教団とどのような關係を持続して行ったかをみなければならぬ。勿論盲僧は記録を持たないので、關係史料としては前記縁起書に於ける以外にない。以下吉武本縁起によってみることにする。

さて文武天皇は都城固定化の端著を開かれ、元明天皇は和銅元年(708)九月には平城巡幸をなされ十月には伊勢神宮に平城宮造營を告げられているが、同三年三月に平城遷都を行い、山階寺を移して興福寺と改称したり、大官大寺を移しているのである。このような平城宮造營の時に盲僧との關係が生れたと伝えている。甲本によると元明天皇は九州から盲僧を招き土荒神の法を修せられ、地神盲僧の称号を下されたことだけが記されてい

るのである。吉武本縁起によると

同四十三代元明天王御代。宮裏難平治。有障碍魔氣。西殿造東崩。朝立夕倒。朝臣怕宸襟不安。既召博士。問其故。是非別儀。堅牢地神御荒奏聞。帝聞召而如何。而可靜謐。有勅問。博士承此。鎮西九国有盲僧沙門。召彼地神被ナシ治。土公法被行者。王宮無為而国土可靜謐由申上。

とある。元明天皇の平城宮造營に「障碍魔氣」があり、西殿を造ると東が崩れ、朝に建てると夕には倒れる。そこで天皇博士を召して問ねると、博士は堅牢地神が荒れているからであると答え、どうすればよいかの問に対して博士は鎮西に盲僧がいるので地神被をし、土公の法を行えば無事に静まるであらうと答えたと伝えている。

堅牢地神品の地神信仰や土公信仰の事が記されている。土公については、既に故宮地博士も触れている如く、神仏習合の発達の問題で平安前期に信仰が行われているといわれている。『和名抄』には

春三月在竈、夏三月在門
土公 秋三月在井、冬三月在庭

とあるごとく、既に平安前期にみられる。土公とは地の精霊で、仏教思想よりはむしろ道教的信仰の対象で陰陽五行説から来た中国の信仰である。この精霊が春夏秋冬にそれぞれ居所を代えるという事が平安初期に既に日本にも紹介されていた事は、既に奈良朝にも部分的に行われていたのではあるまいかと考えられる。しかし平城宮造營に盲僧が紹介されたかどうかは別にして、同教団縁起ではこのように信ぜられているのである。続いて同記には

即依之。勅使被下。召九国盲僧。筑前冷泉津麻仁養。筑後化佐養。伊麻養。肥後摩須養。薩摩他化養。日向与根養。豊前徳養。彼八人從勅上都。帝悦勅曰。宮裏八方分。一方十一人宛。而地神行可勤論言也。

とある。即ち吉武本によると筑前一・筑後二・薩摩一・日向一、と七人になるが、乙本では、筑前冷泉津を博多とし「麻仁養・佐理養」の二人になっているので、八人であらう。この八人が奈良に上った。帝は悦ばれ、宮裏八方の一方を十一人宛で地神行を勤仕せよと仰せられたとある。

このように九州でも壹岐・対馬・大隅を除いた六国から八人が出仕したというので薩摩も同一集団にあったとなっている。その名称も奈良朝の名称に類似の名が連ねられている。勿論これ等の事は正史にはみえないのであるが、筑前筑後に二名宛を宛て、いることは既に本書編集の時には、盲僧の中心を両筑に認めていることは少くとも、この地方に最も隆盛であったであらうことを暗に

伝えているのである。

とに角縁起では論旨により八十八人が必要とあるが、九国から上ったのは八人であるので、不足分は他から集めなければならない。吉武本縁起には、

盲僧徒勅。諸国盲僧雖催促。地神陀羅尼經盲僧八人外之無。是故寺社沙門八十人出會。閉眼八面琵琶図尽。八十人相授。八人盲僧相加。以上八十八人如宣旨。地神秘法行奉誦經。文奇哉。王宮乾角七文計大蛇出。紫宸殿白沙落。

などとある。即ち盲僧八十人が不足であるから諸国の盲僧を催促したが「地神陀羅尼經盲僧」は八人しかないので、寺社の僧八十人を集めて、眼を閉ざし、八面の琵琶の図を画き地神秘法を行うと、不思議なことに王宮の西北から七丈許りの大蛇が⁽¹⁾出て、紫宸殿の白沙の上に落ちたとある。

これについて「社僧は毒蛇に恐れて退散したが、盲僧は見えないので恐れず化佐養・伊麻養（乙書には片目の麻仁養とあり化佐養がない）は右に剣左に杖を以て退治して毒蛇を焼いて箱に入れ「天長地久安全如意満足」と印し、宮裏の東北三里の外に十六丈の穴を掘って納めた。それから宮中は「静謐」、⁽¹⁾「国土」は安全になったとある。甲本ではそこで天皇から「地神盲僧」の号を与えられたとあり、吉武本には「天皇は叡感の余り官途を授け、地神経田として、日向佐土原、豊前上毛、薩摩イサゴ（甲本伊作）松崎、筑後修坂、筑前怡土郡を施された。そこで八人の盲僧は「自余ノ国」に出会して天下泰平の祈禱をしたので、この法が九国に繁栄したとある。

これに対して甲本によると、恒武天皇の時伝教大師が比叡山を造る時、毒蛇が多く、九州から八人の盲僧を招いて、土荒神の法を修した。その八人というのは甲本には今様・満王・袈裟等とあり、乙本には伊麻養・麻仁養・袈裟養等となっている。おそらく同じ伝説から出たものであろう。

ついで甲本には奈良の都ではなく恒武天皇の京都の都を築く時に八人の盲僧を召され、次の平城天皇の時になると、八人中四人は京都に残し、残りの四人だけが九州に還り、夫々に寺と荘園を受けた。京都に残った四人の盲僧は比叡山延暦寺に属した。そして盲僧「満市」を「満正院」と改め、京都地神盲僧の初代となり、逢坂山に精舎妙音殿を建立し盲僧本山としたとなっている。

また吉武本によると続いて畿内より東は四季土用の袂は社家が勤めて来ているとしている。そして引き続き、玄清流の法統を書き出している。即ち、再び俱奈良太子の由緒を述べ、太子は妙音菩薩になりこれを相承しているといっている。そして印度では盲僧は涅槃宗であるが

唐に渡ると三論宗となり、日本では天台宗になったことの来歴を述べようとして、恒武天皇の時の伝教大師との関係を詳細に述べ叡山を開く為に毒蛇の障碍除去については琵琶による地神経誦以外にないことを知ったと伝えている。（そこから玄清が登上するのである。）

(1) 「図尽」とは「図画」の誤写であろう。

三. 盲僧琵琶の始祖玄清

成就院系由来によると盲僧教団の開山は玄清とされ、常楽院系の開山を満正院としていることについては既に触れたが、更に乙本により筑前盲僧の玄清についてみよう。

吉武本によると釈玄清は橘氏で筑前三笠郡の人で光仁天皇宝龜三年（772）七才で出家し、四王寺で俱舎宗を学び、観世音菩薩を信じ、法華経を誦した。延暦七年（788）十七才で盲僧となったので、末世盲人のために一宗一流を立てようとして四王寺峯に十七日間籠り、四天王を祈り、琵琶を弾きながら地神陀羅尼経を誦えた。皆満の朝最澄から叡山に登れといわれたので、玄清は四天王の祈願が叶ったとして感歎して叡山に登った。最澄から魔気の様子をきき、玄清は幣幡香華を供し、内外を清浄にし三宝を拝し四天王を拝し、地神陀羅尼経を二十五遍誦した。すると毒蛇は忽ち退散したという。最澄は二十二才の時山中の造立を終った。そこで玄清の奇特を賞し、成就院の号を与えた。玄清は帰国後四王寺北谷に成就院を建立し、盲僧に地神陀羅尼経を伝え、一流を立て山門末天台盲僧となった。

延暦九年（790）最澄二十四才の時人民疾病に悩んだ。朝廷は憐んで最澄に問われた。そこで最澄は地神陀羅尼経が最もよいと答えた。そこで閭里に至るまでこの経を誦し疾病は悉く除かれた。平城天皇大同二年（807）には最澄は入唐後帰朝した。盲僧は悦び挙げて山門に登った。最澄は入唐の時越の龍興寺で天竺善無畏三蔵第三の弟子順曉阿闍梨に三部灌頂之密法等を受け、陀羅尼経等を伝えられた。その中五竜王五印法は仏の観法であるから盲僧に属させることになった。その他儀式を盲僧に付し、玄清に法眼に任じ、院官袈裟を許したという。

弘仁七年（816）天下に五種の熱病が流行し人民を悩ませた。最澄は命をうけたので成就院及び諸盲僧を召し、中堂に琵琶をひき地神陀羅尼経を誦え、最澄は五竜王五印法・円頓法を行った。すると人民の病悩は忽ち平復した。最澄は玄清に法印の号を賜った。そして叡山も八王子七社の造立が終了した。最澄は玄清に五竜五印法・廻向等を授けたので盲僧は大に行われるになった。翌弘仁八年には勅により盲僧は天下の大社で国家安

全の祈禱をしたといわれている。

以上は吉武本によったのであるが乙本によると、

熱病退散の祈禱は弘仁八年となっていてこの時の祈禱は伝教・弘法共に勅命により行われ、伝教は特に玄清に使者を送ったので玄清は法弟六名と共に叡山中堂で修法した。こうした事で全国の盲僧はその配下に入った。而も玄清の法弟に清教・玄養・玄林・清俊・玄巡・安清・芳清・大雲・蓮心・俊海の十哲があり、之れが九州二島山陰山陽に分派し、大徳以上の僧官をうけていた。

そして玄清は弘仁十四年(823)十月病を得、不治を知り十哲及び高弟を集め、法談の末、十戒の遺言をなし、同月十七日遷化した。五十八才であった。叡山へ報告し四王寺山南坂本に葬った。

となっている。そして吉武本にはこれはない。そして乙本をとるとすれば以後に於てはすべて玄清の法統であって、玄清を初代とすれば数代後の時に当たっているようである。昌泰三年(900)には盲僧が山門戒壇に官位を受けんとし、海上で悪風にあい、海庭に沈んだ。醍醐天皇はこれを憐み、国々鎮守所神で天下延長の祈禱ができるようになされたという。

吉武本によるとそれから四十年後の天慶三年(940)二月十七日には筑陽の盲僧茲眼院円教法印が勅を蒙り、大宰府安楽寺で天下長久の祈禱をした。これが後に例になったとなっている。そして吉武本はこれ以後については何物も記してないのである。然るに乙本にはこの昌泰三年の記事は盲僧叡山よりの帰路明石浦で暴風にあい辛うじて帰国した。となっていて沈没の事はない。

(1) 実は最澄は延暦二十三年に入唐し、翌二十四年に帰朝した。

四. 太宰府座

乙本によると玄清は弘仁十四年(823)十月十七日に遷化したとして伝えられ、今も盲僧教団では開山講として、器楽合奏の盛な法会を行っている。恐らく玄清は実在の人であろうが、彼の死後も盲僧は山門戒壇に於て官位をうけていたといわれるが、昌泰三年(900)九国の盲僧は海上で暴風にあい、海底に沈む者もあったらしい。朝廷はこれを憐み、国所に於て官位をうけられるようにするために、「国々鎮守所神」に「天下延長」の祈禱を行えるようにしたとある。

(1) 完淡萊氏の報告によると

(2) 明治の御代になり廢藩置県後其式典廢せられ、当今は僅かに其名のみ残って宰府座と称し、最寄の地に盲僧集會して読経し、当時の古例を偲ぶ形式だけが行われている。其他之に倣い豊前では宇佐八幡宮・

筑後では高良山玉垂宮・肥前では神崎櫛田宮で同国の盲僧集會し、天下安全の祈禱を行って来たものである。而して成就院開基玄清法印第九世の法孫寿讚大徳永仁六年成就院を博多津に移して寺院を建立し、

とあるが、廢藩置県後神社に集る事はできない筈であるし、宇佐八幡宮等諸国の大社に集會、祈禱したというのはむしろ、縁起にみる昌泰三年の論旨をとるとすれば、この事柄の名残りではなかったろうかと考えられる。勿論これ等の史料は、以上の神社の史料には全くみられない。たゞ豊前豊後では少くとも宇佐八幡宮との関係は深く、宇佐では桐井に護国院という盲僧寺院があり、寺院形式を有していた。享保十年八月廿九日宇佐宮成到津大宮司申付状によると、豊前豊後国の盲僧は「宇佐別当」と称する別当の配下にあった事がみられる。そしてこの「宇佐別当」は明に宇佐八幡宮配下にあった事は明らかであるので、「宇佐別当」は護国院の兼帯の職ではなかったろうかと考えられる。

豊前豊後の盲僧が宇佐八幡宮の管理下にあったのではないかと思われる。史料は佐藤文書の護生院縁起にもある同書中に

思慕我者。宇坐禅林神勅。遂発志願下豊前宇佐。于実元和九年(1623)癸亥春也。

とある。そして後豊後国速見郡石垣に入り護生院を開いているのである。比叡山正覚院がもてあまして盲僧の管理を放棄したのは延宝二年(1674)であるから既に正覚院配下の時にも既に両豊では宇佐八幡宮の配下にあったのである。そしてその事は地神被に宇佐系盲僧は昭和初期に至るまで必ず、八幡本宮御許山大権現に対して彼を行っていたことでも窺われる。更に天慶三年(940)「筑陽の盲僧茲眼院円教法印」は勅をうけて太宰府安楽寺に「天下長久」の祈禱をし、札を紅梅の東枝にし、天満宮の大鳥居家に納めた。これは二月十七日であったので、これ以後それが例となって続いたとなっている。これが後に太宰府座と称して恒例となって、行われたらしく、佐藤文書元禄九年頃の縁起写にも太宰府集會が記されている。豊後国速見郡石垣村護生院も宰府座に集會していたようである。

この集會はその縁起によってこれを一事実とすれば天慶の国家安泰の祈禱であった事となり、将門の乱につながるものである事になる。將軍の追討祈禱の最大のもは八幡宮(宇佐)への祈禱であるが、もし盲僧教団に対しても行われたとすれば如何にこれが当時の重大事であったかを知る事ができる。少くとも江戸時代に於てもこれがこの教団には堅く信じられていた事だけは江戸時代の記録によって確かめられる事である。

- (1) 『芳蹤記』『吉武本縁起』
- (2) 大正十三年二月二十八日福岡日日新聞
- (3) 吉武文書
- (4) 別府市石垣佐藤晃映氏蔵
- (5) 宮成文書一七二号（『大分県史料』）
- (6) 乙本によると六世とある。
- (7) 乙本によると伊勢にも納めたとある。(2)の報告に詳しい
- (8) 乙本・吉武本

五. 盲僧琵琶の分裂

筑前盲僧系縁起によると天慶三年以後全く記れず、急に永仁六年の寿讃大徳（吉武本には受三大徳）の臨江山妙音寺の建立になってしまうのである。平安中期より鎌倉初期の事を全く記してない。にも拘らず、甲本によると逢坂山妙音殿の事など詳細に記し、妙音殿地神盲僧第四代を蟬丸としている。蟬丸については諸説があり、或は醍醐天皇第四皇子ともいわれていたが、この説は否定せられ、宇多天皇の皇子敦実親王に仕えた雑色であろうといふ、この説が信用せられている。又上田景二氏は蟬丸は、三条の蟬丸、逢坂山の蟬丸など数人の人があるといっている。そして蟬丸の時逢坂山の妙音殿は朽廃し、山門⁽¹⁾の志野尾に新しく寺院を造立し、後織田信長によって焼滅した⁽²⁾となっている。

甲本によると逢坂山妙音殿の第十九代宝山檢校の時、源頼朝の命によって、島津家初代忠久に従って薩摩に下った。忠久は伊作郷に寺院を建立し、妙音殿とした。そこで地神盲僧の本山は鎌倉初期より薩摩に移ったことになっているが、山門志野尾の妙音殿もあるから伊作郷の本山は薩摩の盲僧本山であったのであろう。

何れにしても薩摩の地神盲僧は連綿として栄え、室町末期より江戸時代には、淵脇寿長院（三十一代）、家村大光院（三十二代）、長倉常徳院（三十三代）などは、島津忠良・貴久・義久・家久などに重要せられ、薩摩武士の士気を鼓舞したといわれる。

こうして薩摩盲僧は四十四代目の伊集院俊徳に至って明治維新にあい、明治三年六月太政官は盲僧を廃止したが明治九年に許されて鹿兒島市長田町に常楽院を建立し、天台宗として今日に至ったのである。

以上のことからみても平安末期から鎌倉初期の盲僧本山は京都を中心とする妙音殿であった事であろう。では筑前盲僧の伝流はどのような歩みを続けたのであろうか筑前では永仁に妙音寺が出現する以外に縁起にみえないのであるが寿讃が妙音寺を建立できたことには全く盲僧の法統が消えていなかったことであると考えられる。例えば筑前盲僧に天満宮の太宰府座・豊前宇佐八幡宮・筑後高

良玉垂宮・肥前神崎櫛田宮に宰府座が伝わったという伝えは北九州の盲僧は前述の大社を中心に分裂して行ったのではあるまいか。

その理由は平安末期に至ると律令制の大きな崩壊と共に地方社寺は荘園領主としての経済基盤が強くなっている。こうしたために自らこうした領主の被護の中に分散していたのではなかろうかとみるのであるが、遺憾ながらこれ等の社寺には全くそのことを物語る史料はみられない。

そして鎌倉時代に入るが筑前太宰府は役所としての機構は有力であったが、島津氏の如き有力御家人が筑前地神盲僧を庇護した形跡はみられない。従って本山としての支配は山門にうけ、庇護は地方社寺にうけるという形をとったのではあるまいかと考える。

こうした中に寿讃が永仁六年に博多に妙音寺を造ったという事は、その遺物である聖観音像をみても判明する所である。そしてそのことは、北九州地神盲僧の統一を計ろうとしたことであろうが、その時期が、文永弘安の役後国民悲哀の中にあり、更に永仁五年の徳政興行の翌年の建立ということは、戦後復興と琵琶楽の奨励ということに関連して、史料にはみえないが、鎮西奉行北条氏の背後関係を多少とも考えて然るべきではあるまいか。

ところが妙音寺についても、何にも史料を伝えていない。勿論九州管内の武家文書の中にかゝる、芸能宗教に關係した文書の残る可能性もないので鎌倉末から室町時代の事情は全く不明である。

(1) 『薩摩琵琶瀾源録』

(2) 織田信長の焼却後、本山が山門正覚院になったのではあるまいか。

結

このようにみても日本の琵琶楽は恐らく田辺氏も示摘したように奈良時代直前の頃九州に伝わり、平安初期筑前に盲僧玄清という名手が輩出し、これが天台と結びついて、京都に入り、これが中心となり全国的に発展したが、鎌倉初期に薩摩常楽院に一流が発展し、鎌倉末期に再び寿讃が、筑前博多に輩出して北九州、中国の琵琶楽を中興したが、室町時代に再び衰えて門付をする盲僧も出現した。天台とのつながりは、正覚院が中介して行ってきたが延宝二年に關係を断たれてから、北九州盲僧は地方大社に保護を求めたのであろう。⁽¹⁾ 豊前では宇佐八幡宮に豊後では文珠仙寺に補任して貰っている。明治五年には太政官は盲僧を廃したが、明治八年筑前では妙音寺が、薩摩では常楽院が運動し、内務省はついにそれを認し再興した。筑前では妙音寺を高宮に移し、成就院の寺号を再興し現在に至っている。 (未完)

(1) 佐藤文書・宮成文書

(2) 吉武文書